URLの履歴の自動作成

96H716 宮北哲博

1 はじめに

近年、Web ページでさまざまな情報を閲覧することができる。大学の演習室や研究室でも Web ページを閲覧する機会が増えている。そこで過去に閲覧した Web ページの一覧を見たいときがある。WWW ブラウザにも過去に訪れた Web ページの履歴の一覧を表示する機能があるが、これは大学の演習室や研究室のような複数のパーソナルコンピュータを不特定多数の人が共用する環境では、自分専用の過去の履歴を見ることができない。

そこで Proxy サーバのログファイルに Web ページを閲覧した時の URL などの記録が残されているので、それを用い自動的に URL の履歴を Proxy サーバ上で作成し、WWW ブラウザで閲覧できるようにする。

2 研究内容

- Proxy サーバのログファイルでは、誰がどの Web ページを閲覧したか分からないので、Proxy サーバの設定を ident デーモンを利用する設定に変更しログファイルにユーザ名が記録されるように変更する。
- URL の履歴を自動作成したものを、Proxy サーバ上でユーザごとに閲覧できるようにするために ident デーモンを利用してユーザ認証を行う。
- URL だけではどのような Web ページか分からないので、Web ページのタイトルや内容を表示する。
- Web ページの更新をチェックする機能があれば便利なので、Web ページの最終更新日から更新のチェックを行う。
- 快適に Web ページを閲覧するための付加機能として、学生に授業などで Web ページを資料として閲覧させるときに、事前に Proxy のキャッシュディレクトリに Web ページのデータをキャッシュしておけば高速に Web ページが表示されるようになるので、教員が Web ページ上で URL と日時を指定して Proxy のキャッシュディレクトリにキャッシュできるものを作成する。

3 まとめ

本研究でクライアントマシンを使っているユーザごとに、Web ページの内容が分かりやすいように URL の履歴を表示させることができた。しかし、URL の並んでいる順番が Web ページを閲覧した時間の新しい順に並んでいるものしかないので、ユーザが自由に閲覧回数の多いものや更新されたものだけを表示できる機能などを付け加えれば使いやすくなると思われる。また、ユーザを認識するために ident デーモンを利用したが、これは Windows 系の OS では標準で実装されていないのでインストールする必要があり不便である。

さらに今後は、URL の履歴の機能と、Proxy のキャッシュディレクトリにキャッシュできる機能とを組み合わせて、URL の履歴で閲覧回数の多い URL は自動的に Proxy のキャッシュディレクトリにキャッシュする機能を追加すれば更新チェックも頻繁になりさらに快適な Web ページの閲覧を実現できると思われる。